

大津繪ぶし 伊勢音頭



福岡貢は、おぼのなさけで、思はず手にいる、青江下阪、こしにさし、古市油屋へ、行より仲居の萬野がポン／＼前さばきお紺は、わざと愛そづかし、私しやさむらいが、いやになりました合貢さん、これきりで、御ざんすと、きいて貢はクワトせきあげてこれエエ切も、すさまじと羽織をひっかけ喜助にあづけしかたなをさして、つき出す萬野を張たをし、萬治郎さんに、あいたひものじやと、いそぎゆく。



仔猫

笑福亭 松鶴

三遊亭 しん藏 畫

これは船場のある一流の間屋で、表の方で若い衆が四五人寄つて荷造りを仕て居る所へ、遣つて参りましたのが、田舎から出たての婢めかけさん。手には口入屋の書付けを持ちまして、袖の中へ手を入れて、歯かきそこないの蝙蝠の様な格構で、

「はい、チョツクラ物を教へて呉れんかグルムケ」

「コレ、グルムケとはどうやいな」

「私わし、横町の口入屋ひらこまから來りましたがのオ、今小まげな子と、連れのふて來よりましたが、途中ではぐれて、行先が判らんで教へて呉れんか。アンケラカン」

「なに、アンケラカン、そないに一々云ひ艸を替へない。なに書付けを持つてる、それを見せてみい。アーこら俺わし所まや」